

宝町分室

分室長 辻 彰

昭和52年度概算要求が認められ、センター運営委員会において富士通社製M-160システムの導入が決定した。この間、同委員会では、城内と宝町両地区にそれぞれセンター分室を開設し、端末装置(RJE)によってセンター計算機と専用回線によるオンライン方式が検討された。宝町では、工学部や城内に比して計算機利用講座が少ない事情もあって分室の設置に苦慮した。たまたま、計算機教育用にセンターにてVTR装置を50年に購入した際、宝町では薬学部に設置し、プログラム教育を行っていた。そういう事情もあって、宝町5部局運営委員間の協議の結果、薬学部設置案が出され、教授会及び運営委員会の承認を得て、宝町分室が誕生し、私が分室長に任命された。分室のための部屋の改装や電源・アース、内線電話等の取設工事費は宝町5部局の協力を得て、RJE受け入れ態勢を整えた。52年12月にPANAFACOM U-100システム、コンソールプリンター、カード及び紙テープリーダー、ラインプリンター及びカード穿孔機が搬入され、53年1月より稼動を開始した。説明会、講習会を分室単位で開催したところ、利用者が次第に増加し、当時の2400ボアのスピードでは入出力の待時間に不満が出るようになった。その後、メモリーやディスク等のシステムの拡張が行われ、55年にはマイコンによるTSSシステム1台が導入され、RJEは4800ボアに変えられるほど、宝町利用者は種々の計算機処理形態に慣れてきた。

55年12月には、M-170Fの導入計画が進められ、計算機処理能力の向上とTSS末端の強化が検討された。宝町利用者に限定すれば、一般的にプログラム開発に計算機を使用するよりはむしろ、実験値ができれば出来上がりのプログラムを用いて解析する利用形態が主流である。従って、カード入力では、カードにパンチしてデータカード部分だけ入れ換えて読み込ませれば事足りていたので、当時では種々のコマンドの入出力による計算機との会話を必要とするTSS処理は煩わしいものであった。しかし、私は利用者の計算機処理方式がいかであれ、今後の計算機の利用形態はTSSに移行し、将来はそれが研究室単位で行われるであろうと考えていた。そこで、宝町分室利用者に対し、分室での処理はすべてTSSで行い、カード入力を全面的に廃止することを提案した。この提案に対し利用者の協力的な賛同が得られた。運営委員会で新システムについて調整が行われ、宝町分室では、RJEシステムを撤去するとともに、56年9月からディスプレイ9台、同プリンター2台(回線スピード2400ボア)及びグラフィックディスプレイ、同ハードコピー各1台(回線スピード1200ボア)が新設された。TSS講習会が行われ、利用者および利用件数が急増した。カード入出力の経験のない学生諸君は何の抵抗もなくTSSシステムに慣れた。57年には工事費当該部局負担の形態で2台のディスプレイ端末を医学部付属病院に移設した。また、同年9月には医療短期大学にも端局が新設され、宝町分室利用者の便が計られた。

58年4月導入をめぐってセンター計算機システムの機能向上が検討されており、それに伴う各

分室端末機配分の調整が行われている。それによれば、宝町分室ではTSSシステムのスピード向上と日本語処理システムの導入が予定されているが、より多様化する医薬学領域の研究に対応できる分室として発展させたい。これらのシステムを最大限に活用していただくよう各部局の先生方の御協力を願う次第である。

